

府立学校指導教諭等研修 レポート

////////////////////
大きな研修室が後ろまでいっぱいになるほどの、約150名の先生方が参加され、研修はスタートした。福によるイントロダクションでは、まず美術と理科の指導要領を見比べながら、「美術とは知的探究心を刺激し、目的意識をもった観察力をも養うもの」と伝えた。

「美術」は感性・情操の涵養のみならず、「理科」にも通ずるような能力をも育成するのだ。例えば、観察日記をつけるときも、一枚の絵画を鑑賞するときも、「みる」ことから生まれる「発見」、そして「コミュニケーション」が重要になる。

このプロセスをゲーム的に体験するために、次に北野がファシリテーションし「ブラインド・トーク」というワークショップを行った。二人一組になり、片方が目隠しをする。もう片方がスクリーンに映し出された作品を言葉だけで伝える。その後、二人で作品をみながら言葉で想像していた作品との共通点 / 相違点・それが生まれた原因について振り返る。

これだけのシンプルなワークショップなのだが、「思い込みや先入観に気付かないといけない」「根拠にもとづきながらコミュニケーションすること」「一方的に伝えるだけでなく、互いに分からないところを聴き合う」といったいくつもの重要なポイントを「発見」して頂けたようだ。

この体験をふまえ、福のレクチャーが続いていく。アートにおいてもコミュニケーションにおいても重要な「受け手」の存在。「私たちは見たいものを見たいようにしかみない」という「みる」ことについての原理。対話型鑑賞の事例をひきつつも、教育現場の多様な場面と重ね合わされる話だったのでないだろうか。

福がレクチャーで示していたように、ACOP・対話型鑑賞は、「コミュニケーションによる鑑賞教育」であると同時に、「鑑賞によるコミュニケーション教育」でもある。本研修が、「教師」と「生徒」の立場を固定したものとせず、互いに「相手がわからないからこそ知りたい」と興味を持ち合う関係を築くための一つのきっかけになれば幸いである。

参加された先生方の声

・改めて、伝えることの難しさを実感しました。自分が言及しても相手に伝わっていないことや、自分が聴いていても理解できていないことなどがたくさんあると思いました。自分と他者の間に橋を架けるコミュニケーション、そのモチベーションを高めていけるか。たくさんヒントやアイデアをいただきました。早速明日からでも教育実践の中で生かしていきたいと思います。ありがとうございました。

・答がないアートに関する話でしたが、はっきりと答のある物理の授業でも十分応用可能だと感じました。「理解する」ということに関するひとつの答が見えたような気がします。ありがとうございました。

・アイマスク、何をやるんやろうと思っていたが、とてもよいヒントがいただけた。私は、表現の時間にことばで絵を伝えることを生徒にさせているが、それについてもこれから役に立つ情報をいただいた。答えが1つではない問題について考えるというタスクが私の学校に与えられることになったが、これから方法を考えてみたい。ありがとうございました。

・発達障がいについての講師で学校をまわっているが、今日はこの切り口で自分自身すごく納得した。とてもいい学びであった。ありがとうございました。

・教えようとする前に、聞きあう、考えあう、コミュニケーションすることがとても大切だと思います。思考力は、自分の内なる対話力、うまく考える視点を持つことができれば深まる。まず、学校の授業の中で多くの人と対話することで、視点を得たり疑問を持ったりすることが大切だと思います。授業で生かせたらと思います。

・アートとコミュニケーション、予想がつかなかったです。講座を受けてみて、本当に必要なコミュニケーションを考えることができました。むずかしいですが、大切なことだと思います。ありがとうございました。

・「教える」「教えられる」形式の授業では、生徒に理解をもたらすことはムズカシイということを感じました。コミュニケーションはさまざまな解釈が許されている時なり立つ。授業では全て正解に導く作業をしています。楽しくないです。「どうすればいいのか」とまた、自分の中でフタをしてきた課題が頭をもたげてきました。

(文 アート・コミュニケーション研究センター 研究員 北野諒)

ACOP
ART COMMUNICATION PROJECT